

郷土芸能による地域振興とその課題

——広島県北広島町の神楽団実態調査から——

高 崎 義 幸

(受付 2014年5月30日)

1. はじめに

今日、多くの自治体が地域社会における一体感の醸成や経済効果を目的とした地域振興を推進している。とくに過疎化などの人口問題を抱え、農林業以外にこれといった産業に乏しい中山間地域の自治体では、地域の自然や歴史、民俗などのいわゆる地域資源の観光資源化を地域活性化の手段として推進している。ただ、もともと経済と結びつきにくい性質の民俗芸能を観光利用する場合には利用者と被利用者との間で摩擦もあった。そこで、本稿では、神楽のまちとして知られる広島県北広島町を例に、いわゆる条件不利地域における自治体等が郷土芸能を観光資源化し地域振興に利用する際の課題について検討することを目的とする。

北広島町の位置する西中国山地では、伝統的に集落単位で執り行われる奉納神楽が盛んな地域であるが、奉納神楽のほか、神楽の競演・共演大会や定期公演、宿泊施設におけるディナーショーなどの観光用神楽が一年を通じて開催され、都市住民や観光客に人気を博している。また、近年、広島県や島根県ではさまざまな神楽に関する協議会や組織が設立されるなど、自治体を中心に神楽の振興と観光化に力が注がれている¹。

その一方、このような神楽の観光資源化を狙った活動に対しては、神楽の担い手や民俗学者から、民俗芸能としての神楽の「本質性」の崩壊や担い手の負担増加などが不安視されてきたし、また日常生活の中で営まれ伝承されてきた神楽が、演出・加工される過程で芸質が変化すること、あるいは商業利用化そのものに対する批判がなされてきた。

しかし、少子高齢人口減少が進展する中山間地域において、郷土芸能の神楽が継承されていくためには、なによりも住民の生活基盤の安定と担い手の確保が必要であり、そのため地

1 2005年3月、NPO 広島神楽芸術研究所が設立され、インターネットを活用した神楽の情報発信や定期公演「月一の舞い」の開催、神楽に関するイベントの監修やプロデュースを行っている。2006年4月、広島市神楽振興連絡協議会が発足し、国民宿舎湯来ロッジで広島市内の50神楽団の定期公演を開催している。2012年2月、広島広域都市圏協議会内に「“神楽”まち起こし協議会」が設置され、観光商品の開発と情報発信を行っている。2012年3月、中国地方の42の自治体が加盟する中国地方神楽観光振興協議会（事務局は国土交通省中国運輸局）が発足している。2013年2月、島根県石見地域の112神楽団と自治体等で構成される石見神楽広域連絡協議会が発立されるなど神楽の保存・継承と観光資源化および地域振興活用化への動きが加速している。

域の振興は重要である。ただ、地域に根ざした神楽を観光化しすぎると、地域住民からするとよそよそしいものになったり、あるいは‘利用する者’と‘される者’との間で摩擦が発生することがある。ゆえに郷土芸能を観光資源化したり、地域振興に利用したりする場合、集客や経済効果も重要であるが、できる限り担い手の実情や意向に寄り添うことが望ましいと考えられる。

2015年に合併10周年を迎える北広島町では、このたび地域で盛んな神楽の振興と観光資源化計画を策定することとなり、そのための基礎資料の収集を筆者が所属する NPO 法人広島神楽芸術研究所が請け負うこととなった。以下、北広島町神楽協議会に加盟する神楽団を対象に行った調査結果を基に行政等が神楽を地域振興に活用するときの課題について述べたい。

2. 北広島町と神楽

北広島町の概況

広島県山県郡北広島町は、広島県の北西部（芸北地域）にあって北は中国山地を境に島根県、南は広島市と隣接し、標高600～1,000メートルの中山間地に位置している。町のインターチェンジ（千代田 IC）から広島市中心部までは約50kmの距離にある。

北広島町は、2005年2月に芸北町、大朝町、豊平町、千代田町が対等合併して誕生した。現在の人口は19,723人（8,459世帯）で合併当時の20,857人から5.4%減少、65歳以上高齢者の占める割合は34.7%である（2014年5月）。

町の大部分を森林と農地が占め、農林業が盛んで2010年時点の農家数は2,200戸、林家数は1,416戸である。また、降雪量が多く豪雪地帯としても知られ、冬期は町内7つのスキー場や民宿がウィンタースポーツ客で賑わう。民俗分野では、稲作にかかわる民俗芸能が盛んで、ユネスコ世界無形文化遺産の「壬生の花田植」や「新庄のはやし田」、「本地の花笠踊り」などがあるが、なかでも神楽は、中国地方を代表する民俗芸能として知られており、町内には70もの神楽団体が存在する。

北広島町の神楽

その北広島町の神楽は、石見神楽の流れを汲む岩戸系神楽であるが、広島県北西部の呼び名である芸北地域にちなんで「芸北神楽」と呼ばれている。芸北神楽は、秋祭りの神事として、また氏子たちの娯楽としてのみ行われていたが、第二次大戦後まもなく始まった神楽競演大会や隣町の旧美土里町（現安芸高田市）で誕生した新作神楽の流行、そして90年代初期のスーパーカグラの登場等をきっかけに人気を博すようになった。現在では、広島県を代表する観光資源の一つとして、県内各地で、また東京、大阪などの大都市や海外で公演される

など、芸北神楽は「広島神楽」として構築され、地域を越えた活動を展開している。

芸北神楽は、勸善懲悪型のストーリーとリズム感ある奏楽、スピード感ある演舞、そして豪華な衣装に派手な演出が特徴で、およそ祭礼行事の神楽のイメージとは程遠いショー的要素の強い神楽である。北広島町には子どもや女性のための17団体を含め70の神楽団があり、週末ごとに開催される広島県内外の神楽大会やイベント等に出演している。

芸北神楽の上演状況

今日の芸北神楽の上演形態は、奉納神楽とイベント神楽に大別できる。奉納神楽は、年に一度の秋祭りに執り行われる氏神社と氏子のための地区の宗教行事である。イベント神楽は、不特定多数の観客を対象に行われる催し物で、神楽大会（競演・共演）、定期公演、アトラクションなどがある。その他の上演には、神楽団がボランティアで行う慰問公演や海外からの招待公演などがある。

筆者が調べたところ、2013年に北広島町内で上演されたイベント神楽は、37回（神楽大会10回、定期公演10回、アトラクション17回）であった。広島県全体では、307回（神楽大会25回、定期公演177回、イベント68回）を数えた²。

3. 神楽団実態調査

調査概要

北広島町における神楽団の現況と地域振興を目的とした神楽の観光資源化の意向を探るため質問紙調査を実施した。調査は、北広島町神楽振興計画の一環として NPO 法人広島神楽芸術研究所が請け負い、北広島町神楽協議会に所属する54団体に郵送で質問紙を送付し、Fax、郵送で回収した。質問紙への記入は団体の代表者または事務担当者に依頼した。調査時期は、2013年11月27日～12月25日で、回収率は83.3%（45団体）である。

調査項目は、神楽団の1. 基本特性、2. 現況、3. 観光資源化に対する意向を設定した。1. 神楽団の基本特性に関する項目は、①継承区分、②所在地、③代表者名、④ホームページ有無、⑤発足時期、⑥団員構成からなる。2. 神楽団の現況は、①練習状況、②団員募集状況、③過去3年間の上演状況、④保持演目、⑤活動方針、⑥負担・悩み、⑦強み・ウリの7項目から

2 NPO 広島神楽芸術研究所ホームページ「みんなの神楽掲示板」および神楽門前湯治村神楽上演日程表による上演回数を数えた。WEB 上で公開されていないものが多数存在するため、実際の上演回数はずっと多い。また、2013年10月に千代田インターチェンジの道の駅「舞ロード IC 千代田」がリニューアルオープンし、毎週日曜に神楽が上演されるようになったため、北広島町内の上演回数は2014年からさらに増えた。北広島町神楽協議会が発行する2014年度「北広島町神楽カレンダー」によると、奉納神楽や慰問神楽を除く観光客向けの神楽上演（2014年4月から2015年3月まで）は、町内8ヶ所（コミュニティセンターや道の駅、体育館、ホテルなど）で57回に及ぶ。

把握した。3. 観光資源化への意向は、地域振興のため神楽を観光資源として活用することについて、「大変良い」～「大変悪い」までの5段階で質問し、さらに自由記述欄を設けた。

調査結果

1) 神楽団の構成

北広島町の神楽団の団員構成を性別、年代別に示した（表1）。44神楽団の合計人員は779人、一団体当りの平均人員数は17.7人であった。性別では、男性が85.1%を占めた。年代別にみると、最も比率が高いのは30代の22.3%で、40代の20.4%、20代の17.8%と続いた。

男性が9割近くを占める理由について、かつて神楽団に入れるのは農家の長男だけであったことや、舞人になると、20キロ近い衣装を着用し激しい舞を舞うため、女性にとって体力的に困難であることなどが考えられる。そのため女性は笛や手打鉦等の楽人を担当することが多い。同様の理由から10代～30代の男性が舞い手の中心を担っており、40代以降は楽人や裏方、後輩指導を担当することが多くなるという。重い衣装を着用し、速く激しい舞を舞う芸北神楽は、長期間、舞い手を務めることは困難であると言える。

表1 神楽団の構成

項目		人 (%)	平均人数
性	男	663 (85.1)	15.1
	女	93 (11.9)	2.1
	無回答	23 (3.0)	0.5
	合計	779 (100)	17.7
年代	10代	69 (8.9)	1.6
	20代	139 (17.8)	3.2
	30代	174 (22.3)	4.0
	40代	159 (20.4)	3.6
	50代	113 (14.5)	2.6
	60代以上	85 (10.9)	1.9
	無回答	40 (5.1)	0.9
	合計	779 (100)	17.7

構成員の変化を探るため、先行調査との比較を行った。米田雄介らが2000年に行った広島県内神楽団体の実態調査（米田，2001）と整合性のとれた29団体について構成員の変化を探った（表2）。

まず、29の神楽団の合計人数をみると、2000年時点で569人いた神楽団員は、13年間で約

表2 団員構成の変化：29団体の合計（1団体当たり平均）

項目	2000年（米田調査）	2013年（本調査）	差異（2000／2013）
性	男	517（17.8）	463（16.0） ▼54人（90%）
	女	36（1.2）	58（2.0） △22人（161%）
	無回答	16（0.6）	- ▼16人
	合計	569（19.6）	521（18.0） ▼48人（91.6%）
年代	10代	39（1.3）	56（1.9） △17人（144%）
	20～30代	264（9.1）	223（7.7） ▼41人（84.5%）
	40～50代	213（7.3）	181（6.2） ▼32人（85.0%）
	60代以上	53（1.8）	61（2.1） △8人（115%）
	合計	569（19.6）	521（18.0） ▼48人（91.6%）

8%（1団体当たり1.6人）減少し、521人になった。性別では、男性は517人から約10%（1団体当たり1.8人）減少し463人になったが、女性は36人から61%増加し58人になった。年代別にみると、10代（144%）および60代以上（115%）はそれぞれ増加しているが、20～30代（84.5%）と40～50代（85.0%）はともに約15%減少している。

2) 練習状況

神楽団はどのくらいの頻度で練習を行っているか、表3に示した。最も比率が高いのは「週2回」の31.1%で、次いで「週3回以上」の26.7%であった。週2回以上練習を行う神楽団が6割近くを占めており、活動的な状況が伺える。一方、「祭の直前のみ」15.6%や「月に1、2回」8.9%などのあまり練習していない神楽団が存在するのは、後述するように、団員不足や仕事等の都合で人数が揃わず練習ができなかったり、あるいは奉納神楽だけを目的に活動している団体があるからである。

表3 練習状況 団（%）

①祭の直前のみ	7（15.6）
②月1、2回	4（8.9）
③週1回	6（13.3）
④週2回	14（31.1）
⑤週3回以上	12（26.7）
無回答	2（4.4）
合計	45（100）

3) 団員募集状況

神楽団は団員を募集しているのか、また入団に制限などはあるのか、表 4 に示した。93.3% の神楽団が団員を募集しており、内訳をみると、神楽団の所在地区外からの入団も可能が 88.9% で、氏子に限り募集が 4.4% であった。氏子以外の団員の割合については今回質問しなかったが、町外から練習に通う団員も少なくないと聞く。

表 4 団員募集状況 団 (%)

①氏子に限り募集中	2 (4.4)
②他地区からの入団も可能	40 (88.9)
③募集していない	2 (4.4)
無回答	1 (2.2)
合計	45 (100)

4) 過去 3 年間 (2011年～2013年) の上演状況

神楽団は、年間どのくらい上演しているのか、過去 3 年間の推移を示した (表 5)。神楽の上演形態は、奉納 (氏神社・氏神社以外へのお呼ばれ奉納) とイベント上演 (神楽大会、定期公演、アトラクション)、その他 (慰問、海外等) に大別できるが、ここでは氏神社への奉納を除き、①神楽大会、②アトラクション・定期公演、③地区外奉納 (お呼ばれ奉納)、④その他に分類した。

2011年から2013年までの上演回数の合計は、1,351回で、一団体当りの平均は11.0回であった。最大値は47.3で、上演回数の最も多い神楽団は年間47回以上上演している。最小値は0で、氏神社の奉納以外は上演していない団体が存在する。そのため、上演回数の偏り幅は大きく、標準偏差は11.3であった。

表 5 上演回数の推移：合計 (一団体当り平均)

	2011年	2012年	2013年	合計 (平均)
①神楽大会	108 (2.8)	110 (2.6)	116 (2.8)	334 (2.7)
②アトラクション・定期公演	226 (5.8)	230 (5.5)	253 (6.0)	709 (5.8)
③地区外奉納	83 (2.1)	88 (2.1)	91 (2.2)	262 (2.1)
④その他	12 (0.3)	14 (0.3)	20 (0.5)	46 (0.4)
合計 (平均)	429 (11.0)	442 (10.5)	480 (11.4)	1,351 (11.0)
最大値	48	50	44	47.3
最小値	0	0	0	0
標準偏差	11.9	11.2	10.8	11.3

(2011年は39団体、2012年は42団体、2013年は42団体の合計・平均)

全体の上演回数の推移をみると、2011年から2013年の過去2年間で約10%（46回）、1団体当たり平均で1回程度増加している。これは冒頭で述べた最近の神楽の振興と観光資源化を目的としたさまざまな組織の設立および活動の影響もあるのだろう。

次に神楽団はどこで上演しているのか、過去3年間の推移を示した（表6）。3年間の合計（一団体当たりの平均）をみると、北広島町内で531（3.9）回、広島県内（町外）で716（5.3）回、広島県外で87（0.6）回、海外で2（0.01）回であった。また、2013年は、北広島町神楽団の合同チームで中国公演を行っている。年別にみると町内および広島県内（町外）で上演回数は微増しているが、広島県外は横ばいである。

表6 上演場所の推移：合計（一団体当たり平均）

	2011年	2012年	2013年	合計
①北広島町内	169 (4.3)	175 (4.2)	187 (4.5)	531 (4.3)
②広島県内（町外）	229 (5.9)	235 (5.6)	252 (6.0)	716 (5.8)
③広島県外	31 (0.8)	28 (0.7)	28 (0.7)	87 (0.7)
④海外	1 (0.03)	1 (0.02)	0 (0.0)	2 (0.02)
合計	430 (11.0)	439 (10.5)	467 (11.1)	1,336 (10.9)

（2011年は39団体、2012年は42団体、2013年は42団体の合計・平均）

5) 保持演目

北広島町の神楽団の保持演目の種類とその数を示した（表7）。

芸北神楽には、「旧舞」「新舞」というジャンルが存在する。第二次大戦前から継承され、記紀神話に登場する物語を中心とするテンポのゆったりした6調子の演目を旧舞といい、戦後、能や歌舞伎の演目を題材に旧美土里町（現安芸高田市）で誕生したテンポの速い8調子の演目を新舞と呼んでいる。近年では、いわゆる旧舞の演目であっても8調子のテンポで舞う神楽団が登場するなど舞を規定する楽のリズムは曖昧になってきており、自己申告制のような形態になっている。それでも神楽の競演大会では、旧舞と新舞のそれぞれの分野で優勝団体が選ばれるなど区別がなされている。近年は、歴史上の出来事や地域の伝説を神楽化した創作演目を保持する団体も増えており、演目の多様化が進んでいる。

表7 保持演目の数と種類

	旧舞	新舞	創作	合計
保持演目数	353	183	23	559
平均	7.8	4.2	0.5	12.4

北広島町の神楽団の保持演目をみると、1団体当たり12.4演目を保持しており、内訳は旧舞7.8演目、新舞4.2演目、創作0.5演目であった。

6) 活動方針

神楽に対する団の活動方針を複数回答で質問した(表8)。最も比率が高かったのは、「昔からの演目には手を加えず、できる限りそのまま継承したい」の48.9%であった。また「演出や仕掛けなどは最低限でよい」28.9%、「できる限り氏神さんの上演だけしたい」13.3%という保守的な意見がある一方、「創作演目にも取り組んでみたい」35.6%や「お客様が驚くような演出や仕掛けをしてみたい」28.9%など新しい取組をしていきたいと考える進歩的な団が30%弱あることが明らかになった。

	団体 (%)
昔からの演目には手を加えず、できる限りそのまま継承したい	22 (48.9)
創作演目にも取り組んでみたい	16 (35.6)
神楽大会やイベントなどに多く出演したい	15 (33.3)
演出や仕掛けなどは最低限でよい	13 (28.9)
お客様が驚くような演出や仕掛けをしてみたい	13 (28.9)
東京や大阪等の大都市や海外で公演してみたい	8 (17.8)
できる限り氏神さんの上演だけしたい	6 (13.3)
その他	5 (11.1)
合計	45 (100)

自由記述

- ・氏神が祀ってある神社の秋季大祭にて無事に神楽を奉納できるようにと考えている。先人によって継承されてきた地元の文化である神楽を貴重な財産として後世に確実に伝承できるように努力している。
- ・儀式舞や希少演目(上演されること、または上演できる団体が少ないなどの演目)に力を入れていく。
- ・仕事や地域を大切にすることで神楽も頑張るよう常々話している。神楽という団体活動を行う中で人間として成長して欲しい。神楽だけという人間にはなって欲しくない。
- ・上演依頼があればできる限り参加するようにしている。依頼者の思いを出来る限りくみとるようにしている。

7) 負担・悩み

現在、神楽団にとって負担になっていることや悩みは何か、複数回答で質問した（表9）。最も比率が高かったのは「団員が少ない」の64.4%で、次いで「若い団員が少ない」46.7%、「仕事との両立が困難」44.4%であった。総じて最も大きな課題は人的要因であることが明らかになった。自由記述においても人員不足による活動の尻すぼみや将来の活動に対する不安がみられた。

表9 負担・悩み（複数回答） 団体（%）

負担・悩み	団体（%）
団員が少ない	29 (64.4)
若い団員が少ない	21 (46.7)
仕事との両立が困難	20 (44.4)
練習時間の確保が困難	13 (28.9)
知名度が低い	8 (17.8)
必要経費の捻出	5 (11.1)
出演機会が少ないこと	4 (8.9)
各団体・組織との連絡調整	2 (4.4)
団員が多い	1 (2.2)
小道具などを作る手間	1 (2.2)
その他	3 (6.7)
合計	45 (100)

自由記述

- ・団員が高齢化するなか、新規団員もなく、少人数で運営している。仕事や他の同好会活動と重なるなど思うような練習も出来ず活動がしりすぼみになっている。これの繰り返しで運営継続がきびしい。
- ・色々取り組みたいが、仕事の都合等で人数が揃わないのでなかなか取り組めない。
- ・団員が多いに越したことはないが、実働の22～23人が適当である。
- ・今後の継承をどのようにしていくか、現在は人数がいるが、これからが心配である。

8) 強み、ウリ、アピールポイント

神楽団は、自らの強みやウリ、アピールポイントをどのように考えているか、複数回答で質問した（表10）。最も比率が高かったのは、「舞・奏楽の上手な人がいる」の17.8%で、「若い団員が多い」「競演大会の優勝経験がある」11.1%と続いたが、この質問に対しては、遠慮心が働いたのか、無回答が多かった。

表10 ウリや強み (複数回答)	団体 (%)
舞・奏楽の上手な人がいる	8 (17.8)
若い団員が多い	5 (11.1)
競演大会の優勝経験がある	5 (11.1)
オリジナル演目がある	4 (8.8)
団員が多い	2 (4.4)
練習量が確保できる	3 (6.7)
HP や SNS 等を活用した情報発信ができる	3 (6.7)
経済的余裕がある	2 (4.4)
知名度がある	1 (2.2)
文化財指定を受けている	1 (2.2)
その他	9 (20.0)
合 計	45 (100)

自由記述

- ・団員のまとまり，地域の支援がある。
- ・地域に立派な体育館があり，地元の方に活動をみていただけるよう活動している。
- ・昔からの神楽を継承していることが強み。これらの舞いや奏楽を大切にしつつ「重み」のある「土くさい」神楽を継承していきたい。
- ・神楽に関する研究のほか舞法の基本的な法則を重要視している。

総じて，人的要因が神楽団の強みであり弱みでもある。継承者としての若い団員や舞や奏楽の巧者，インターネット等を活用した情報発信能力のある者，仕事との両立が可能な者がいるか否か，将来的な人材確保が可能かが，団体の強み・弱みであり課題でもある。

9) 神楽の観光資源化

北広島町で神楽を観光資源として活用することについて、「大変良い」～「大変悪い」までの5段階で質問した(表11)。「大変良い」と「良い」を合わせた比率が64.4%を超え，行政が神楽を観光資源として活用することについて，6割超の団体が「賛成」で，「どちらでもない」は35.5%，「悪い」は0%であった。しかし，自由記述では，神楽団の負担の増加や神楽の「伝統」および「本質性」の崩壊を危惧する記述が見られた。さらに，神楽団員の奉仕の精神や努力を理解して欲しい，という思いから，自治体が地域振興策として神楽を利用する場合の経済的支援や団員の就業斡旋，休暇取得への理解促進等に対する支援要請を求め

る記述もみられた³。

インフォーマルな活動である神楽を地域振興に利用する際の最も大きな課題は、利害関係の異なる主体間における合意形成である。北広島町の場合、町内で70に及ぶ神楽団体間および他の民俗芸能保存団体との間のコンフリクトをどのように調整し住民の合意を形成していくのか、行政の役割が期待される。

表11 神楽の観光資源化について 団 (%)

大変良い	20 (44.4)
良い	9 (20.0)
どちらとも言えない	16 (35.5)
悪い	0 (0.0)
大変悪い	0 (0.0)
合計	45 (100)

自由記述

- ・ 神楽団としてできる範囲協力し、町の観光アピールに努めて行きたい思いはあるが、団員の減少・仕事（学校）との両立が大変難しい問題となっている。
- ・ 観光資源としてはアピール力が強いと考えられるが、神楽の本来あるべき姿や本質から考えると資源的な扱いには多方面から疑問がある。
- ・ 地域のそれぞれの神楽が有り、それがPRできるならばよいが、派手なものばかりではなく、地味でもそれを大事に守っている方もいることも忘れないようにしてもらいたい。いろんな形があることをPRしてもらいたい。
- ・ 北広島町を語る上で神楽は無くてはならない存在である。この地域に根ざした郷土芸能を保存・継承し、技量を高める事は非常に重要なことと認識している。しかし、神楽を観光資源として活用することには、団員の負担を強いることになる。また、神楽そのものが団員の奉仕の精神で成り立っているため、行政利用であれば経済的援助を検討することが必要ではないか。
- ・ 神楽を観光資源として活用することは非常に良い。しかし、神楽の伝承に関しては、

3 この神楽団員が抱く「奉仕の精神」や「努力」という感覚について、友岡邦之は、代表的使命感という言で説明している。彼はアマチュア琉球舞踊家たちの観察を通して「彼らがしばしば自身の活動を公的なものとして認識している」ことを挙げながら、「伝統芸能の継承活動に熱心な人々は自らの活動を私的な趣味というカテゴリー内に納めておらず、『自分は金のためではなく、社会のために、伝統の継承のために尽力しているのだ』という意識が強く働いている」とし、彼らの活動は、「公共性に関する一種の“主観的・代表的使命感”が文化活動の強力な動員となっている」と指摘している（友岡，2001：151）。

各神楽団の努力でのみ成り立っている。公的機関からの金銭的援助や団員への就職の斡旋、各事業所への働きかけ（休暇の取得や職場全体への理解等）を積極的に行って欲しい。現状として就職先が無いために神楽を断念したり、仕事内容等により神楽に行くことが出来ず退団したり、休暇の取得が難しいために公演を辞退したりすることは珍しくない。神楽を利用するのであれば、神楽が伝承していけるためのバックアップ体制が不可欠である。

- ・ 競演大会の出場者がマンネリになっているので、知名度の低い団体を出場させてほしい。

小括

以上、調査結果を簡潔にまとめると下記のようなになる。

- 1) 団員の高齢化や新規入団者の減少による人員不足や仕事等のやりくりで練習や上演活動に支障がある。
- 2) 舞の中心となる10代～30代男性の人員確保ができない団体は、運営が困難な状況にある。
- 3) 13年前（2000年）と比べ神楽団員は約8.4%減少している。とくに20代～50代男性の減少幅が大きい。一方、女性や10代の団員は増加しており、この理由については今後の研究の課題である。
- 4) 出演回数が多い神楽団は、年間約50回の上演をこなすなど負担が大きい反面、ほとんど上演機会のない神楽団も少なくない。または、仮に上演要請があったとしても、さまざまな事情により出演できないことがある。
- 5) 芸北神楽は、人気の高さゆえに広島神楽として構築され、神楽団は地域を離脱した活動を展開している。上演場所や上演回数は町外の方が多くなっている。
- 6) 神楽が観光資源化されることで、神楽の伝統的形態の崩壊や「あるべき姿」「本質」の喪失を危惧する団体も少なくない。
- 7) 地域振興を目的とした神楽の観光資源化を進める場合、神楽団・住民・団員の勤務先・他の民俗芸能等の間の合意形成が必要となる。

4. お わ り に

以上、広島県北広島町の神楽団調査から郷土芸能による地域振興の可能性と課題について考察した。

近年、広島県では神楽の振興・観光資源化を目的とする組織が相次いで設立され、自治体や旅行業界と連携した活動が活発化している。また北広島町では、2013年10月に千代田イン

ターチェンジの道の駅「舞ロード IC 千代田」がリニューアルオープンし、神楽舞台が設置されるなど、神楽の観光資源化に向けたインフラ整備が進められている。しかし、こうした状況を歓迎する団体がある一方、負担増加の心配や民俗の商業利用に対する批判もあった。自分たちは神楽の継承のために努力している、ボランティア精神でやっている、という社会的使命の感覚、あるいは観客や行政、企画運業者等の要望に応えるために舞っているのではない、自ら楽しみたい、自分たちの神楽を舞いたい、という思いが神楽の担い手にはある。

芸北神楽は、この地方における生活の場に根づいたシンボルであり、住民の生きがいであり、コミュニケーション手段である。それが、現代社会の変容の中で地域を離脱し、「広島神楽」として構築され、観光資源としての価値を付与された。そしてブランディングされた芸北神楽が、いわば逆輸入される形で地元の地域振興に利用されるとき、立場の異なる様々な主体間でコンフリクトが生じている。観光資源としての価値を与えられた以上、競争や対立が起きて当然かもしれないが、主体はあくまでも担い手である神楽団なのだから、可能な限り彼らの思いに寄り添う形態の地域振興活用が望ましい。一方、神楽団においては、いくら町外での上演数が増えたとしても活動基盤である地元の活性化は団の存続や舞の継承、また自身の生活にとっても重要である。このように、地域の活性化と神楽の振興は両立する関係にあるが、そのためには各主体間の合意が必要であり、行政にはその調整役割が期待される。

参 考 文 献

- 北広島町, <http://www.town.kitahiroshima.lg.jp/> (2014年5月27日取得)
「古事記を神楽で巡る神秘の旅」実行事務局, 2013, 『中国地方の神楽の魅力』.
広島県市町別高齢化率 (H25. 3. 31現在)
保母武彦, 1996, 『内発的發展論と日本の農山村』岩波書店.
三村泰臣, 2013, 『中国・四国地方の神楽探訪』南々社.
_____, 2004, 『広島神楽探訪』南々社.
森田真也, 2003, 「フォークロリズムとツーリズム—民俗学における観光研究—」『日本民俗学』263: 92-102.
長澤壮平, 2008, 「「上演」に根ざす地域伝統文化—岩手県早池峰神楽を例として—」『社会学評論』59(3): 556-582.
_____, 2007, 「資源としての民俗文化の動態—岩手県岳神楽を例に一」『日本民俗学』250: 1-26.
NPO 法人広島神楽芸術研究所「神楽ポータルサイト KAGURA の社」<http://www.npo-kagura.jp/> (2014年5月27日取得)
迫 俊道, 2010, 『芸道におけるフロー体験』溪水社.
友岡邦之, 2001, 「伝統文化の活用における代表的使命感と制度化・私財化—沖縄における伝統芸能の現代の変容をめぐる—」『都留文科大学研究紀要』(55): 139-156.
米田雄介, 2001, 「神楽の変容とその社会的基盤に関する研究」平成12年度県立大学重点研究事業研究成果報告書.

SUMMARY

Regional re-vitalization through folk performance arts and problems

— The proposal from the survey of the Kitahiroshima-cho Kagura dan —

Yoshiyuki Takasaki

If you are a regional Re-vitalization by utilizing the folk performance, the economic effect is important. But to grasp the situation of the practitioner is required to take municipalities. Therefore, we conducted a quantitative survey of Kagura-dan. In this paper, we want to propose a challenge in that it clarifies the idea for the tourism resources of the situation and Kagura group on the basis of the survey data, and to make the regional development Kagura.